慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	記憶言明における心的内容の個別化について：“slow-switching” caseを通した想起判断に関する考察
Sub Title	Individuation of mental content in memory utterance : examining the memory judgement through the argument of “slow-switching” Case
Author	福田, 敦史(Fukuda, Atsushi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.21 (2006. 5) ,p.47- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20060531-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

記憶言明における心的内容の個別化について

―― “slow-switching” caseを通した想起判断に関する考察 ――

福　田　敦　史

1．はじめに

「心の哲学」における問題の一つに，私たちの心的内容の「個別化(individuation)」は，社会的環境や物理的環境といったものに依存するものなのか，あるいは，まったくこうした外的な環境への依存なしに，自らを内省することで自身の心的内容を直接的に得ることができるものなのか，というものがある。

確かに，日常の生活においては，通常，自分自身の現在の心的内容について，私はほかの誰よりもよく知っていると言ってよいようにも思われる。そしてそれは，私が他の人の心的内容について知る場合や，あるいは同様に，他の人が私の心的内容を知る場合とは，根本的に異なっているようにも思える。

例えば，私が椅子に座って来週から行く旅行について考えているとしよう。私が今，来週からの旅行について考えていることを自分自身が知るために，他人の証言を必要としたり，あるいは，自分自身の様子を外から観察する必要はない。「旅行について私が考えている」ということは端的に知られうるように思えるのである。

逆に，私から見れば，自分以外の他の人が何を考えているのかは，その

人の言語表現や振る舞いなどの外的な表出を通してでなければ知ることはできない。また，他の人が私の心的内容を知る場合も，このような外的な表出が必要であると言えそうである。今の例で言えば，他の人から見た場合，私はただ椅子に座り，ぼんやりとしているだけのように映るかもしれない。私が来週からの旅行について考えている，ということを他の人が知るためには，例えば，私が旅行のガイド・ブックに手を伸ばしながら「今度の土曜日から旅行に行くんだ」と発話する，といったような外的な表出が必要となる。

こうした日常的な場面をみると，他人の心的内容に対する場合とは異なり，私は自分が何を考えているのか，信じているのか，感じているのか，あるいは，何を想像したり思い出したりしているのかを，特に何かの証拠に拠らずとも，端的に知っているように思われる。すなわち，私は自分の心的内容に関して，ある「特権的な接近（privileged access）」の方法を有しているように思われるのである。

自分自身の心的内容について，内省的で特権的な自己知を持っているとするこのような考えは一般に「内在主義（internalism）」と呼ばれる。これに反して，心的内容に関する「外在主義（externalism）」ないし「反―個人主義（anti-individualism）」とされる立場は，私たちの心的内容は，少なくともその一部分は社会的・物理的環境や言語共同体といったものに依存せずには，個人のなかでは個別化することができないというものである。

自己知と外在主義の問題に関わるこうした論争は，周知のようにパットナムによる「双子地球（Twin-Earth）」による思考実験により起こり[(1)]，このパットナムの議論を下敷きにしつつ，問題をより広い範囲に適用したバージによって，さらに盛んになったと言ってよいだろう[(2)]。パットナム

※　再録されている文献からの引用頁は，再録からの頁数である。

(1)　Putnam（1975）.

(2)　Burge（1979）; Burge（1988）.

の議論においては，‘water’と‘twater’という自然種名の指示の問題として扱われたものが，バージにより，言語表現一般の問題にまで広げられ，また，個人の心的内容が依存するものとして，自然的・物理的環境とともに，社会的・言語共同体的環境も挙げられることになる[(3)]。

こうした心的内容についての内在主義と外在主義との間でなされてきた議論から分岐してきたものとして，記憶ないし記憶内容を巡る問題がある。それは，バージによる「緩やかな転換のケース（“slow-switching” case）」の議論に端を発するものであるが，これまでにすでにさまざまな立場からの論考が提出されている。以下では，この記憶内容を巡る問題を取り上げるが，本稿は，この問題に関する最終的な答えを出すことを目的とするのではなく，むしろ，問題を手引きとして，私たちの想起判断を考える上での材料を導き出すことを主眼としたい。

次からの2節と3節で，双子地球という思考実験における記憶内容を巡る問題のあらましを紹介する。続く4節では，この問題に関してこれまで提出されている論考のうちから，主要な考え方を見てみることにする。5節と6節とでは，それまでの検討で得られた論点を基にして，想起判断についての考察をすることにする。

2．双子地球

本稿では，記憶言明を主題として扱うが，まずは，双子地球の思考実験を簡単に振り返ることで，自己知と外在主義の問題の概要を見ておくことにしよう。

私たちの宇宙に，地球とは別に双子地球というものがあるとする。この双子地球は，地球と全く同様なありかたをしている。双子地球には，例えば，この地球における各人物に対応して，各人にそっくりの分身が存在し，

---

(3)　双子地球の議論に関連した文献は枚挙に暇がないが，Pessin and Goldberg (1996)はこの議論とその影響を概観するのに便利な著作である。

また，地球上で起きる各出来事に対応して，同じ出来事が双子地球においても起こっているとする。

ただし，地球と双子地球とのあいだには唯一異なる点がある。それは，地球における水の分子構造がH_2Oであるのに対し，双子地球における水はXYZという組成をしている，ということである。もちろん，双子地球においても，その水が川や海を満たし，時々空から雨として降ってくるものであり，また，それを飲んだりする，といった点はまったく地球と同じである。ただ，その分子構造が，地球と異なる組成を持つものなのである。

ここで，地球にはシローという人物がおり，双子地球にはシローのドッペルゲンガーとでも呼べるジローがいるとしよう。このふたりは，双子地球という想定上，身体の微細な構造にいたるまで同一の複製ということになる(4)。

ここで，シローとジローが，次のような文（A）を発話したとする。

（A）　私は水は透明だと信じている。

この発話に関して，例えば機能主義的に考えるとどうなるであろうか。双子地球の想定上，ふたりは同一の分子構造をもっているのであるから，同じ脳状態をもち，同じ機能的状態にあるということになる。したがって，機能主義的な考えに基づくのであれば，シローとジローのふたりに対して同一の信念内容が帰属されるということになる。

しかし，地球における「水」という語は，地球における分子構造H_2Oをもつ水を指すのであり，一方，双子地球における「水」という語は，双子地球における分子構造XYZをもつ水を指す。したがって，地球における

---

(4)　もちろん，身体を構成する物質には水が含まれるわけであるから，厳密にはシローとジローの身体の組成は異なるといえる。しかし，この点はここでの議論に本質的な影響を与えるものではない。

地球人であるシローが発話する（A）の文は，地球における分子構造H_2Oをもつ水についての信念であり，一方，双子地球における双子地球人であるジローが発話する（A）の文は，双子地球における分子構造XYZをもつ水についての信念であることになる。

つまり，シローとジローは，たとえ同一の脳状態にあるとしても，ふたりを取り囲む物理的環境の相違により，異なる信念内容が帰属されることになるのである。このことは，個人の心的内容の個別化が，その当の主体の内的な状態からのみ可能となるものではなく，主体をとりまく環境に依存するものである，という外在主義の帰結をもたらすこととなる。

3．緩やかな転換

このような双子地球という思考実験を用いた心的内容についての自己知と外在主義との問題から分岐してきたものとして，記憶ないし記憶内容とその判断を巡る問題がある。これは，バージが論じた地球から双子地球への「緩やかな転換のケース（“slow-switching” case）」と，これへの反論がなされることで始まったものと言える。前節に引き続いて本節では，この「緩やかな転換のケース」を見ておくことにしよう。

まず，地球人であるタローが，地球から双子地球へと緩やかな転換をしたものとする。「緩やかな転換」とは，地球から双子地球への転換がタロー自身は気づくことなく行われ，また，タローが，双子地球の環境に適応するのに十分な期間が過ぎたとする，というものである[(5)]。確認しておくならば，私たちの心的内容が環境に依存するという外在主義の主張が正しい

---

(5)　ここでは，地球から双子地球への（一度の）転換のみが語られているが，後のバージの説明によれば，地球と双子地球とのあいだを数次に渡って転換する事態も「緩やかな転換」のケースに含まれている。なお，その際であっても，転換先の環境に主体が適応するのに十分な時間が経過することが必要であることは同様である。Burge（1988），p.115.

ものであれば，例えば，地球におけるタローの「水は透明だと信じている」という信念文にでてくる「水」という表現は，地球における分子構造H_2Oをもつ水を指すことになる。一方，双子地球に移ってからのタローの「水は透明だと信じている」という信念文の「水」という言葉は，双子地球でのもの，すなわち分子構造XYZをもつ水を指すことになる。

ここで，例えば，双子地球において，タローが以前の自身の経験（地球での経験）を振り返り，

（B） 私はバケツ一杯の水を一気に飲んだことを覚えている。

と発話したものとする。そして「緩やかな転換」の起こる前，すなわち，地球において，タローは実際にバケツ一杯の水を飲んだ経験があるものとしよう。

さて，それでは，この「私はバケツ一杯の水を一気に飲んだことを覚えている」という（B）の記憶言明におけるタローの信念は，過去の時点で地球においてその経験をしたときのもの，すなわち地球における分子構造H_2Oをもつ水についての信念なのであろうか，それとも，今，思いだしているこのときの環境である双子地球でのもの，すなわち双子地球における分子構造XYZをもつ水についての信念なのであろうか。

この問題に関して，バージ自身は，第一階の判断内容，つまり「バケツ一杯の水を一気に飲んだことがある」と同様，第二階の判断内容，つまり「バケツ一杯の水を一気に飲んだことを覚えている」も環境に依存するとする。そして，そのうえで，バージは，判断内容の「自己帰属（self-ascription）」そのものは，環境に依存することを必要とはしないとして，外在主義的な立場と自己知の特権性が両立可能であることを主張している。しかし，これに反論がなされることで，記憶言明を巡る問題が始まることになるのである。次節では，この問題についての立場をいくつか見てみることにしよう。

4．記憶言明を巡る問題

バージへの反論の先鞭をつけたとも言えるボゴシアンは，「緩やかな転換」における記憶言明に関して，ある奇妙な問題が生じると述べている。ボゴシアンによれば，先の例において，外在主義的な立場をとるのであれば「バケツ一杯の水を一気に飲んだ」ということをタローは忘れたのか，そうでなければ，タローは「バケツ一杯の水を一気に飲んだ」ということを知らなかったのか，というどちらかの選択肢しかないとされる(6)。

というのも，外在主義的な立場をとるとすれば，心的内容が環境に依存するのと同様に，記憶内容も環境に依存するとするのが自然である。とすれば，タローの記憶言明「私はバケツ一杯の水を一気に飲んだことを覚えている」の記憶内容である「バケツ一杯の水を一気に飲んだこと」は，その発話がなされた時の環境に依存し，双子地球における分子構造XYZをもつ水についてのものとなる。しかし，この「緩やかな転換」の想定上，タローは，双子地球においてバケツ一杯の水を一気に飲んだことはないのだから，タローの記憶言明（B）は偽ということになる。「私はバケツ一杯の水を一気に飲んだことを覚えている」という記憶言明（B）が偽であるならば，タローは「バケツ一杯の水を一気に飲んだ」ということを忘れたのか，そうでなければ「バケツ一杯の水を一気に飲んだ」ということを知らなかったのか，とのどちらかとされる。

そしてボゴシアンによれば，とられるべき選択肢は後者，すなわち「バケツ一杯の水を一気に飲んだ」ということをタローはそもそも知らなかったのだ，と論じられるのである。

ルドローによって，ボゴシアンのこの議論は次のように簡略化されているので，挙げておこう(7)。次の推論におけるPは，ここでは「バケツ一杯

---

(6)　Boghossian（1989）, pp.171–172.

(7)　Ludlow（1995）, p.313；Ludlow（1996）, p.323.

の水を一気に飲んだことがある」というものである。

1） もし，タローが何も忘れていないのであるならば，タローがt_1において知っていることは，t_2においても知っている。

2） タローは何も忘れていない。

3） タローはt_2においてPということを知らない。

4） したがって，タローは，t_1においてPということを知らなかった。

さて，このボゴシアンの推論に関してルドローは，1）の前提に批判の矢を向けている。ルドローによれば，外在主義的な立場からすれば，むしろ自然な解釈は，タローは「バケツ一杯の水を一気に飲んだ」という心的内容を忘れたのでも知らなかったのでもなく，心的内容が「変移（shift）」した，ということなのだとされる[(8)]。

地球において分子構造H_2Oをもつ水についての判断内容と，双子地球に移った後になされる記憶言明の内容とは，「緩やかな転換」によって異なる環境，異なる言語共同体に移った結果，異なる心的内容となるわけだが，この差異は，水についての新たな情報をタローが得たからでも，あるいはタローが水について何かを忘れたからでもない。単にタローを取り囲む環境の違いによって指示対象が異なることとなり，内容が変移し，差異が生じたのである。

つまり，ルドローによれば事態は次のようになる。まず，t_1においてタローはPということを知っている。そして，忘れるということと心的内容の変異とは異なることと捉えられ，t_1とt_2との間でタローは何かを忘れたわけではなく，t_2においてタローが思い出しているPという思考内容が変移したのだ，ということになる。したがって，たとえタローが何も忘れてはいないとしても，t_1において知っていたことを，t_2において知らないということも生じうるのだ，ということが主張され，上の推論における前提の1）が退けられることとなる。

---

(8) Ludlow（1995）, p.309.

しかし，このようなルドローの議論に対し，例えば，ブルックナーは，ルドローのように心的内容が変移したとするのは誤りであり，タローの記憶言明は，間違った記憶ないし「うわべの記憶（apparent memory）」なのだとする。

ブルックナーによれば，例えば，t_1において，すなわち「緩やかな転換」の起こる前，つまり地球においてタローが「私はバケツ一杯の水を一気に飲んだことを覚えている」という記憶言明（B）を発話したとすると，その場合の記憶内容は地球における分子構造H_2Oをもつ水についての内容となる。そして，t_2において発話される「私はバケツ一杯の水を一気に飲んだことを覚えている」という記憶言明（B）における記憶内容は，双子地球における分子構造XYZをもつ水についての内容となる。そして，ここでの「緩やかな転換」の想定上，t_2において発話される記憶言明（B）は偽であることになる。

この場合，タローはt_2において，t_1における心的内容を「思い出すことに失敗している（fail to remember）；忘れている」ことになり，ブルックナーによれば，これは明らかに何かを忘れているということの事例だとされる。したがって，ボゴシアンの推論の「２）タローは何も忘れていない」が成立しないことになる(9)。

５．「覚えている―忘れた」という対と記憶の成立

こうした記憶を巡る問題が，外在主義と内在主義の論争において，特別な問題を提起するものではないとする論者もいる。例えば，ゴールドバーグやタイなどは，記憶言明を巡るとされるこうした問題は特に記憶言明に限った論点ではなく，外在主義と内在主義のごく通常の論点に還元できるものであるとしている(10)。

---

(9)　Brueckner（1997）, pp.323–326.

(10)　Goldberg（1997）；Tye（1998）.

確かにこうした論者の指摘には一理あるものと言えよう。しかし，これまで見てきた記憶言明を巡る問題は，記憶や想起というものをどのような働きとして考えるか，という問に関して興味深い論点を引き出すことができるように思えるのである。以下では，これまで見てきた問題から，記憶や想起というものに関して，どのような論点を導き出すことができるのか論じていくことにしよう。

一般に，記憶が記憶として成立していると見なすことができるためには，最低限次の3つの条件が必要と考えてよいだろう。それは，

α）過去における，ある事柄の経験
β）過去の経験についての，現在における表象
γ）過去の経験と，現在の表象とを結ぶもの

である[11]。ここでは，α）の条件について考えておくことが必要である。

通常，記憶が記憶とされるためには，その記憶が，過去に実際に体験したことについてのもの，ないし，実際に獲得した知識についてのもの，ということが満たされていなければならないと言えるだろう。想起されている件の経験が，過去において実際に自身が経験している事柄であるということが必要となるわけである[12]。したがって，「私は先週試験を受けたことを覚えている」という言明が想起判断であるためには，いま思い出されている内容「私は試験を受けた」という出来事が実際にあったことでなければならないわけである。

⑾ Martin and Deutscher（1966）も参照。この条件に関しては，「現在における表象」とは何なのか，また「過去の経験と現在の表象とを結ぶもの」とは何なのか，といったことに関しても論じられねばならないが，今回は，本稿の内容に直接関連のある条件のα）のみについて考察するものとする。

⑿ この点に関してはいわゆる「擬似記憶（quasi-memory; quasi-remembering）」の問題があるが，ここでは扱わない。

ここで，この点について考えるために，いわば逆の事柄である「忘れる」ということについて少し考えてみたいと思う[13]。「忘れた」あるいは「覚えていない」といった表現は，これも一般に，実際に過去に何か経験したことがあり，その経験を今となっては思い出すことができない，という場合に用いられるとしてよいだろう。であるから，過去に経験してはいないことに関して「忘れた」という表現を用いることは不適切であると言えよう。

例えば「ワシントンでどこに行ったか忘れた」と私が発話したとしよう。この場合，実際に私がワシントンに行った経験はあり，そのことは覚えているのだが，例えば，実はスミソニアン博物館に行った経験があるのにも関わらず，それを今となっては思い出すことができないというのであれば，この発話は適切な発話となる[14]。

しかし，私がワシントンに行ったことはなく，そもそもアメリカにも行ったことがないとすれば，この発話は適切な「忘れた」という語の用法ではないと言えよう。「覚えている」は「忘れた」と表裏一体の表現であり，「覚えている―忘れた」と対になる意味での表現を適切に用いるためには，「覚えている―忘れた」とされる件の経験が過去において実際になければならないのである。

さて，ここで，さきほどの「私はバケツ一杯の水を一気に飲んだことを覚えている」というタローの記憶言明（B）に戻ることにしよう。まず，この文に真理条件を適用するとするならば，この言明は偽となるという点

---

⑬　後の註において言及しているようにNagasawa（2002）においても「忘れる」ということが扱われている。しかし，「忘れる」ということをそのまま「広い内容」として扱うことには問題が残る。単に真理値の問題としてだけ扱うと，いかにして同一の命題が真から偽になったのかという「忘れる」ということにとって重要なアスペクトが抜け落ちてしまうのである。

⑭　ここでの議論には，memory *de re* とmemory *de dicto* との差異といった非常に困難な課題が控えていると筆者は考えているが，本稿では論じずに措く。

に関しては受け入れてよいだろう。双子地球に移ってからの「水」という語は，分子構造XYZをもつ水を指すことになるから，「緩やかな転換」の想定上，この場合，タローは「水」という語の指示に失敗している，ないし，適切な語を用いていない，ということになる。

ただし，例えばブルックナーが主張していたこととは相違して，この記憶言明（B）が偽であることが，そのまま，タローがある記憶内容を忘れたということにつながるのではないということに注意しなければならない。タローは「緩やかな転換」の想定上，双子地球において，バケツ一杯の水を一気に飲むという経験をしてはいない。だから「忘れた」ないし「覚えていない」という表現と対になる意味での「覚えている」という発話にはならないのである。

例えば，タローが双子地球においても，バケツ一杯の水を飲んだことがある場合――もちろん，この場合の水は双子地球における分子構造XYZをもつ水になる――その上で，その経験を忘れていた場合には，タローはある記憶内容を忘れた，と言えるのである。しかし，念のために付け加えておくならば，このことは，ここでの「緩やかな転換」の想定においては，生じていない事柄であったわけである[15]。

---

(15) 論点が拡散してしまうので，ボゴシアンとルドローの考えについては本文中ではなくこの註で取り扱うものとする。

まず「心的内容が変移した」というルドローのような考えはどうであろうか。ルドローによれば，t_1においてタローはPということを知っており，t_1とt_2との間でタローは何かを忘れたわけではなく，t_2においてタローが思い出しているPという思考内容が変移したのだと捉えられていた。この心的内容の「変移（shift）」というもので，果たしてどのようなことがルドローの念頭に置かれているのか，実はそれほど明らかではない。けれども，ここでは，分子構造H_2Oをもつwaterについての思考内容から，分子構造XYZをもつtwaterについての思考内容へと変わったと理解するのが最も自然であろう。

しかし，そうすると，緩やかな転換後にタローが有しているtwater思考について，まず外延的に捉えるならば，双子地球の川や海を満たしている透明な液

6．過去の体験についての情報

ここで，その議論に与するものではないが，ルドローやベルネッカーが「記憶の働きは，心的内容を記録したり保存したりし，後にそれを再生するというものではなく，過去のエピソードについての情報を提供すること[16]」と述べていることに着目することは，ここでの議論にとって有用な

体で分子構造XYZを持つものを指すことになる。また，もし，内包的に捉えるとするならば，仮に，思考内容が変異してtwaterについての思考内容となっているのであれば，この思考は概念twaterについてのものということになるだろう。ということは，心的内容が変異したと捉えると，すべての記憶信念が常に偽であることとなり，緩やかな転換のケースの場合にはそもそも記憶というものが不可能であることになってしまうのである。Kraay（2002）, p.301.

なお，この帰結は，緩やかな転換によって以前の概念を喪失するとルドローが捉えているからである。バージ自身は，緩やかな転換によって概念が喪失するとは考えてはいないことに注意。Kraay（2002）を参照。

さて，それでは，最初に記憶を巡る問題を立てた際に「バケツ一杯の水を一気に飲んだということをタローはそもそも知らなかった」と主張していたボゴシアンの議論が正しいのだろうか。だが，そうではないようである。

ボゴシアンの記憶を巡る問題についての直接的な対処としては，Nagasawa（2002）の取り扱いが最も明快であると思われる。まず，ナガサワは「忘れている（forgetting）」という事態の捉え方を2種類に区別する。それは，「狭い忘却概念（narrow conception of forgetting）」と「広い忘却概念（wide conception of forgetting）」とされる区別である。狭い忘却概念とは「もし主体の当該の脳状態が同じ状態のままであるならば主体は何も忘れていない」というものであり，広い忘却概念は「もし主体が，t_1でPと知っていたことをt_2においてPと知らないならば，主体は何かを忘れている」というものである。

そして，ボゴシアンの推論では，推論の1）を立てる時には広い忘却概念が用いられながらも，推論の2）を立てる時には狭い忘却概念の方が用いられてしまっている。ボゴシアンの推論は，本来区別されるべき忘却概念を区別せずに使わずには，あるいは曖昧なまま使わずには成立しないものなのである。

(16)　Bernecker（1998）, p.341.

ことであると思われる[17]。

認知科学や脳科学において明らかにされてきた研究をみると，私たちの記憶という働きが，脳の部位に，ある種の情報が保存され，それが刺激されることによって，過去の経験について思い出す，というものであることを拒否することは困難であるように思える。しかし，このことは，想起を，過去の体験の時点で個別化された心的内容がそのまま保存され，そして後にその個別化された心的内容を再現する働きとして理解することとは別のことである。

記憶の働きは，過去のエピソードについての情報を提供してくれるものなのであって，過去に個別化された心的内容をそのまま保存することにあるのではない[18]。心的内容の個別化というものは，もし，なされるのであれば，その時その時に，情報状態に基づいてなされるものであり，そして，

---

⑰　また本稿での主題とは異なるが，Evans（1982）も参照。エヴァンズは想起を，過去の体験において獲得した「情報状態（informational state）」を保持し，この情報状態に基づいて概念化の働きが行使されることとして捉えている。なお福田（2004）では，エヴァンズの考察を基にして想起の成立に関して論じている。

⑱　Burge（1998）は，記憶の働きとして内容や態度を「保持（retain）」し「保存（preserve）」することを挙げている。これは一見すると本論の主張に反するものに見えるが，しかしバージにおいても，過去に個別化された内容をそのまま再現するものとして記憶が考えられているわけではない。むしろ，記憶は過去の出来事や内容について（about）のものではなく，また指示対象としての記憶内容を同定する必要も，取り出す必要もないとし，過去の思考内容を現在に「結びつける（link）」ことに記憶の働きがあるとする点など，記憶に関するバージの考えは本論の主張と両立可能であると考える。こうした論点や，記憶を「前方照応（anaphora）」と類比的に論じるバージの主張を巡る議論としては，Burge（1993）；Burge（1997）；Christensen and Kornblith（1997）；Lawlor（2002）などを参照。

　だが，ここでも筆者は，記憶の働きを単に「前方照応（anaphora）」としてだけ取り扱う仕方では，想起の重要なアスペクトが抜け落ちてしまうと考えている。

その時の社会的・物理的環境とその時に有している概念に依存してなされるものなのである。

「私は水は透明だと信じている」という（A）のような信念文ないし判断文においては，多くの場合，第一階の判断内容と第二階の判断内容の時制にズレが生じていないので，心的内容が依存する環境の問題に関してこれまで見てきたような問題は生じにくい。しかし，（B）の「私はバケツ一杯の水を一気に飲んだことを覚えている」のような記憶言明，より正確には想起判断の場合には，第一階の判断内容と第二階の判断内容の時制が必然的に異なるものとなるため，こうした混乱が生じることになるわけである[19]。

しかしながら，タローの記憶言明（B）が偽になるということに，一種の反発を感じることは十分に理解できるものである。というのも，タローは双子地球において，地球における分子構造H_2Oの水を指示することには確かに失敗している。しかし，分子構造H_2Oの水ではあるものの，タローは実際に地球においてバケツ一杯の水を飲んだ経験をしてはいるではないか，そして，そのことをタローは伝えたかったはずだ，というわけである。

このタローの記憶言明（B）の真偽を問う場合には，先にも述べたように，「水」という語の適用に失敗しているものとして偽とするしかないだろう。このように，真理条件の適用に際しては，タローの記憶内容を，いわば「広

---

⑲　実は（A）と（B）の区別はそれほど簡単なものではない。（A）の信念の内容が，過去における経験によって獲得されたものである場合（そして，私たちの信念や知識の少なくないものがこれに該当すると思われるが），（A）は記憶に基づいた事実記憶としての信念ないし知識の発話ということにもなるからである。このことに関しては「体験記憶（experiential memory）」と「事実記憶（factual memory）」との違いについて丁寧に論じる必要があるが，これについては別の機会に扱う予定である。本稿での取り扱い方は，（B）を典型的な体験記憶として見なし，（A）を事実記憶に限定されない一般的な信念文として見なしている，ということになる。

い内容（wide content；broad content）」として捉えていると言えよう。

しかし，このタローの発話における，例えば意図や欲求といった，行動に関わる文脈で記憶言明（B）を理解するためには，タローの記憶内容をいわば「狭い内容（narrow content）」としてとらえて理解することが可能であろう[20]。例えば，タローが，双子地球においてであっても「私はバケツ一杯の水を一気に飲んだことを覚えている」と発話してから，今回もう一度バケツ一杯の水を飲むことに挑戦してみる，という行動は十分に理解できるものである。

このように，心的内容の個別化に関して，その真偽を問う場合には，内容を「広い内容」として捉えるべきだと考えるが，行動に関わる意図や信念に関して問題とする場合には，内容を「狭い内容」として捉えるべき，あるいは少なくとも，「狭い内容」として捉える仕方が有用である場合があるということは確かであるように思える[21]。

心的内容を，「狭い内容」として捉える場合には，第一階の記憶内容が依存する環境と，第二階の記憶判断が依存する環境とを，別個に扱い区別しなければならない場合もあろう。これは，第一階の判断内容と第二階の判断内容の時制が異なる記憶言明の故ということである。

しかし，念のために付け加えておくならば，たとえ，行動に関わる意図や信念を理解するために，タローの記憶内容を「狭い内容」として捉える場合であっても，タローの記憶言明（B）の心的内容が，「狭い内容」として過去において記録され，これが保存されている，と捉えるのは誤りである。ある時に個別化された心的内容が，記録され，保存され，そして想起によって再現する，と考えることが誤りであることは「狭い内容」の場

---

⑳ 「広い内容」と「狭い内容」の区別に関しては，Block（1986）を参照。だが，筆者は，ここで「狭い内容」を脳状態として捉える立場に与しているわけではない。

㉑ Block（1986），pp.618–627.

合においても同様なわけである。

7．おわりに

双子地球の思考実験，そして緩やかな転換の事例は，その元々の主題である外在主義と内在主義とのあいだの論争から，いわばその落とし子として，記憶というものについて考える際の興味深い論点を残してくれたものと言える。

「～ということを覚えている（remember that）」という記憶表現を適切に用いるポイントとして，この表現が「覚えている―忘れた」という対になる意味で用いられているのでなければならない。そして，この対となっている意味で用いられるためには，「覚えている―忘れた」とされる件の経験が過去において実際にあったのでなければならない。そのためには，単に過去と現在との真理値のみに着目するわけにはいかないのだった。

したがって，記憶言明がたとえ偽であったとしても，このことからそのまま，その記憶内容を忘れたという忘却の事例に該当するわけではない。当然至極のことではあるのだが，過去において実際にある経験をしていて初めて，その経験を思い出せないときに忘れたと言えるのであり，その経験を思い出せるときには覚えている，と言えるのである。

とはいえども，記憶の働きが，この過去における個別化された経験内容を記録したり保存したりし，それをそのまま再生することにあるのではない。記憶の働きは，過去の経験についての情報を現在の思考に結びつけるものだが，その心的内容の個別化はその時その時なされるものであり，そしてその時の環境とその時に有している概念に依存してなされるものなのである[22]。

---

(22)　本稿は，日本哲学会第61回大会（2002年）での発表（「第二階の志向的判断としての記憶の特性―― slow-switching-case と記憶の問題から――」）を基に

参考文献

Bernecker, S.(1998), 'Self-Knowledge and Closure', in Ludlow and Martin(1998), pp.333–349.

Block, N.(1986), 'Advertisement for a Semantics for Psychology', in *Midwest Studies in Philosophy* vol.10, University of Minnesota Press, pp.615–678.

Boghossian, P.(1989), 'Content and Self-Knowledge', *Philosophical Topics* 17, pp.5–26, rep. in Ludlow and Martin(1998), pp.149–173.

Brueckner, A.(1997), 'Externalism and Memory', *Pacific Philosophical Quarterly* vol.78, no.1, pp.1–12, rep. in Ludlow and Martin(1998), pp.319–331.

Burge, T.(1979), 'Individualism and the Mental', in *Midwest Studies in Philosophy* vol.4, University of Minnesota Press, pp.73–122, rep. in Ludlow and Martin (1998), pp.21–83.

————(1988), 'Individualism and Self-Knowledge', *The Journal of Philosophy* 11, pp.649–663, rep. in Ludlow and Martin(1998), pp.111–127.

————(1993), 'Content Preservation' *Philosophical Review* 102, pp.457–488.

————(1997), 'Interlocution, Perception and Memory' *Philosophical Studies* 86, pp.21–47.

————(1998), 'Memory and Self-Knowledge', in Ludlow and Martin (1998), pp.351–370.

Christensen, D. and Kornblith, H.(1997), 'Testimony, Memory and the Limits of the A Priori', *Philosophical Studies* 86, pp.1–20.

Evans, G.(1982), *The Varieties of Reference*, Clarendon Press.

福田　敦史（2004）「想起の構成的側面と保持的側面」,『科学基礎論研究』第101号 Vol.31, Nos.1, 2（科学基礎論学会）, pp.17–24.

Goldberg, S.(1997), 'Self-Ascription, Self-Knowledge, and the Memory Argument', *Analysis* 57, pp.211–219.

Kraay, K.J.(2002), 'Externalism, Memory and Self-Knowledge', *Erkenntnis* 56, pp.297–317.

Lawlor, K.(2002), 'Memory, Anaphora and Content Preservation', *Philosophical Studies*

している。しかし，発表後，筆者の考えが発展，変化しているところが多くあるので，大幅に加筆修正を施している。それでも，まだ修正が不十分なところがあると思われるが，今後の機会に譲りたい。

109, pp.97–119.

Ludlow, P.(1995), 'Social Externalism, Self-Knowledge and Memory', *Analysis* 55, pp.157–159, rep. in Ludlow and Martin(1998), pp.307–310.

————(1996), 'Social Externalism and Memory: A Problem?', *Acta Analytica* 14, rep. in Ludlow and Martin (1998), pp.311–317.

Ludlow, P. and Martin, N. [eds.](1998), *Externalism and Self-Knowledge*, CSLI Publications.

Martin, C.B. and Deutscher, M.(1966), 'Remembering' in *Philosophical Review* 75, pp.161–196.

Nagasawa, Y.(2002), 'Externalism and the Memory Argument', *Dialectica* 56, pp.335–346.

Pessin, A. and Goldberg, S. [eds.](1996), *The Twin Earth Chronicles*, M.E.Sharpe.

Putnam, H.(1975), 'The Meaning of "Meaning"', in *Mind, Language and Reality*, Cambridge University Press, pp.215–271.

Tye, M.(1998), 'Externalism and Memory I', *Proceedings of the Aristotelian Society* Supplemental Volume 72, pp.77–94.